

## ヤルタから76年の夏に

夏休みも後半に入りました。オリンピックの終了と相前後して、広島・長崎の被爆者を追悼する式典、そして8月15日の全国戦没者追悼式と続き、旧盆（盂蘭盆会：先祖のために供え物をし、お経を唱える儀式）の季節とも重なって、今年も日本全体が亡くなった人を偲ぶ時期になりました。

私は今年59歳になりましたが、こんな私にも若手と呼ばれた20歳代の頃はあって、そのころの夏休みはバレーボールに明け暮れていました。8月の中旬のこの時期は、だいたい校内で合宿をしていました。朝練習が終わって食事をすませたあと、午前の体育館練習が始まるまでのしばしの時間、職員室のテレビを見るのが日課でした。

当時NHKでは、8時半ころから、「戦争を知っていますか」という季節番組をやっていて、たとえば風船爆弾という布製の気球に爆弾をつるしたものをつくって、偏西風に乗るだろうと太平洋岸からアメリカ本土に向けて飛ばし続けた話や、沖縄での地上戦で看護要員として動員された女学校の生徒（ひめゆり部隊）の人の話、長崎の原爆投下の直後から、懸命の救護活動を行った医師の話、終戦直前にソ連軍が突如侵攻してきて大混乱の中、旧満州（中国の東北部）から家族ばらばらになりながら逃げかえってきた人の話などが、戦争体験者自身へのインタビューで構成され、放送されていました。30年近く前のことですから、まだ戦争体験者もたくさんいて、初めて語られる話もあり、近しい人を亡くした思い出が切々と語られました。

話は変わりますが、岩波書店という出版社から「世界」という月刊誌が出ているのですが、当時はそこに藤村信さんの書いた「パリ通信」という文章が不定期に掲載されていました。読む人をしびれさせるような名文を書くことを、「筆が冴える」といいますが、藤村さんの筆はまさに冴えわたっていて、世界情勢について縦横無尽に論じた読み応えのある文章でした。ちなみに、この「世界」という雑誌が1946年に創刊された時の初代編集長は、「校長室より21」で以前紹介した吉野源三郎さんでした。（「君たちはどう生きるか」を書いた人です。）

藤村さんの「パリ通信」はその後何冊かの単行本にまとめられて出版されています。その一つに「ヤルター戦後史の起点ー」（岩波書店）という本があるのですが、みなさんは「ヤルタ会談」と言われて、どんな歴史的出来事か思い浮かびますか？

第2次世界大戦の戦後処理方針をめぐって、大国の代表が集まった会議が何度か開催されています。カイロ会談(1943.11)、ヤルタ会談(1945.2)、ポツダム会談(1945.7)などがあります。このうち藤村さんは、当時のソ連の保養地として有名だった、クリミア半島のヤルタで開催された会談を、その後の戦後世界の起点になった出来事であるにとらえ、詳しく調べて文章にしました。イギリスのチャーチル首相、ソ連のスターリン共産党書記長、アメリカのF. ルーズベルト大統領の三者がヤルタで話し合い協定として結ばれた内容は多岐にわたりますので、そのすべてについてここで説明することはできません。しかし、この会談によって、アメリカとソ連という二つの超大国の対立（いわゆる東西冷戦）を基本的な構図として

その後の世界が動いていくことと、国際連合という組織を設置して国際問題の解決を図っていくという、戦後の国際体制の骨格がつくられました。

日本に関していえば、当時すでに第2次世界大戦の敗戦は濃厚でしたが、日ソ中立条約に望みをかけて、終戦に向けた仲介をソ連に期待していました。しかしヤルタ会談では秘密協定としてその時は発表されませんでした。当のソ連はナチス・ドイツ降伏後の2ないし3か月後に、日本との開戦を約束しています。実はアジア太平洋戦争の開始直後から、ソ連はアメリカなどから日本との開戦を頼まれていたのですが、ドイツとの戦闘に多大な兵力を投入し、その犠牲も多かったことから、日ソ中立条約を楯に断り続けていたのです。

アジア太平洋戦争において、日本軍はアメリカの圧倒的な兵力に歯が立たず、たとえば沖縄戦では、軍人と一般の沖縄島民合わせて約15万人の死者が出たと記録にあります。県民の約1/4が死亡したとされたとされ、とてつもない犠牲者数ですが、実は同じ沖縄戦でアメリカ軍も1万人以上の死者を出し、作戦を指揮していた司令官のバックナー中將は、戦闘の末期に沖縄で日本軍の砲撃により戦死しているのです。どれだけ凄まじい戦闘だったかがわかりますし、アメリカとしては死に物狂いで戦う日本軍との戦闘でこれ以上の犠牲者を出さずに、ソ連の参戦によって少しでも早くアジア太平洋戦争を終結させたかったのです。

ドイツの敗戦後に開催されたポツダム会談で、日本の戦後の処理方針が決定され、原爆の投下とソ連の参戦を受けて、日本政府はポツダム宣言を受諾し、第2次世界大戦は終わりました。しかしヤルタ体制の下で、アメリカとソ連の対立は続き、ドイツや朝鮮、ベトナムなどが分断国家となり、朝鮮やベトナムでは激しい内戦が行われました。私がみなさんと同じ高校生の時は、ドイツはドイツ連邦共和国（西ドイツ）とドイツ民主共和国（東ドイツ）に分断されており、さらに東ドイツの首都ベルリンには、市街地に長い壁が築かれて、都市が東西に分割されていたのです。

しかし、1980年代に入ると、このヤルタ体制にもひびが入るようになります。ソ連の圧倒的な影響下にあった東ヨーロッパの国々の社会主義政権が揺らぐようになり、東西にベルリンを隔てていた壁が壊され、当のソ連ではゴルバチョフ（共産党書記長のちに大統領）の下で、改革開放を唱うペレストロイカ路線が推進されていきました。ソ連の正式名称はソビエト社会主義連邦ということで、ロシアをはじめとした15の共和国の連邦国家であったわけですが、そこから離脱する共和国が出たり、共和国内の民族紛争が激しくなりました。特にグルジア（現在のジョージア）、アルメニア、アゼルバイジャンのなどのあるコーカサス地方の紛争は激しく、藤村信さんは「パリ通信」で、その背景を詳しく論じました。

1989年12月、そのゴルバチョフとアメリカのブッシュ大統領（ブッシュは親子で大統領になっていますが、その父親の方）の会談が、地中海を臨む小国家マルタで行われ、東西冷戦の終結が宣言されました。その少し前にゴルバチョフは中国の最高権力者であった鄧小平とも会談して、中ソ対立の終結を表明していたので、世界は東西2極対立のヤルタ体制から、多極化時代のマルタ体制へ移行していったのです。